

「カマキリの赤ちゃん (2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

カエルは、オタマジャクシのうちには飼うのは簡単だ。メダカの餌でも何とかなる。しかし、足が生えて、小さなカエルになったら大変だ。サイズが小さなカエルに食べさせる生きた餌が、なかなか手に入らないからだ。校庭の池でオタマジャクシを捕まえて飼っていた子どもたちが、世話に困って私のところに持ってくるのは、大抵そんなタイミングだ。しかし、生き物の飼育が苦手な理科教師(たとえば、私ですか・・・)の場合、結局ほとんどは、もとの池に返しなさい、と指示をすることになり、子どもたちはがっかりする。

アゲハの幼虫は簡単に飼える。ミカンの葉さえあれば、あとは何もいらない。幸い校庭に大きなナツミカンの樹があって、若葉がいくらでも手に入る。しかし、カマキリの赤ちゃん(幼虫)はそうはいかない。小さくても肉食で、生きた小さな虫を好む。アブラムシが最適なのだが、毎日入手できるとは限らない。しかもそのまま集団で飼っていると、必ず「共食い」を始める。それも自然の摂理なのだが、どうも共食いだけは子どもたちに見せたくはない光景だ。

まあ私のように「虫嫌いな教師」の場合、「飼う」という方法は後回しにして、この小さな虫をよく観察する指導に、専念したほうが良さそうだ。



写真は、小指の先にのっかった、カマキリの赤ちゃん

んである。全長 15mm ほどであるが、翅以外のカマキリの特徴は全部そろっている。アゲハの「幼虫と成虫のちがいは、大変な差である。



赤ちゃんといえども、「忍びの術」はちゃんと心得ている。正面からカメラを向けると、警戒して、ゆっくり「後ずさり」するのだ。目も一人前で、キョロキョロとして、まさにカマキリのそれである。



後肢を口元に持って行って、手入れをしているところ。スゴイ！早く子どもたちに観察させたい。